

## 大学生における友人関係機能と孤独感の関連

藤原美聡\*・石田 弓\*

The relationship between the friendship function and the loneliness among university students

Misato Fujihara\* Yumi Ishida\*

The purpose of this study was to reexamine the friendship function structure of university students with respect to the closest same-sex friend, and investigate the relations between the friendship function and the loneliness. Loneliness Scale by Ochiai (LSO) was used for the loneliness measurement. As a result, factor analysis revealed six factors in the friendship function scale. Also, a path analyse indicated that there were sex differences in the friendship function related to the closest same-sex friend (who exerts an influence with respect to ‘feelings of loneliness leading to increased isolation’). Furthermore, there was no relation between the friendship function and ‘feelings of loneliness inducing a sense of individuality’. These results suggested that the friendship function of university students with respect to the closest same-sex friend have the different influence on the subscales of the loneliness.

**Keyword:** the friendship function, loneliness, university students

### 問題と目的

#### 青年期の友人関係研究における友人関係機能

同性の友人との関係は、青年期の重要な対人関係の1つと考えられ、大学生を対象とした友人関係に関する研究が数多く行われている。これらの研究では、友人とのつきあい方(長沼・落合, 1998; 落合・佐藤, 1996)、友人との心理的距離のとり方(藤井, 2001)、友人関係における期待や欲求(榎本, 2000; 和田, 1993)など、友人関係を構成する特定の側面を分解して抽出しているものが多い。一方、丹野・松井(2006)は、友人関係が個人の広義の内的適応に与える影響や、内的適応に果たしている役割を「友人関係機能」とし、友人関係機能の概念的整理と自由記述調査を行った。そして、丹野(2008)の研究では、「安心・気楽さ」、「娯楽性」、「関係継続展望」、「情緒的結びつき」、「相談・自己開示」、「支援性」、「肯定・受容」、「学習・自己向上」、「人生の重要な意味」の9側面を下位尺度とする、全45項目からなる友人関係機能尺度が作成され、各下位尺度の主成分分析によって

---

\* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduates School of Education, Hiroshima University)

各尺度の1次元性が確認されている。しかし、下位尺度間に強い相関がみられるものが存在し、その友人関係機能の構造には疑問が残るため、丹野(2008)が作成した友人関係機能尺度の項目を用いて、友人関係機能の構造の再検討を行う必要があると考えられる。

### 友人関係と孤独感の関連

青年期は、他の時期と比べて孤独感が高まる時期とされている。例えば、工藤・西川(1983)は、大学新入生男子が強い孤独感を示したことを指摘している。また、孤独感得点の上位群は下位群に比べて、友人の数が少ない、気軽に語り合える友人が少ない、人から相談を受けることが少ない、などの友人関係と孤独感との関連もみられている。高木(2003)は、大学生の同性友人とのつきあい方と孤独感の関連を検討し、自分の本音を表さないという防衛的なつきあい方をしている場合に孤独感が高くなることを指摘している。この研究で用いられた友人関係の尺度(落合・佐藤, 1996)は、「友人とのつきあい方」という1つの視点から作成されたものである。また、この尺度は、特定の友人との関係について回答させるものではなく、友人全般について回答させるものであったため、調査対象者によって、複数の友人との関係を平均して回答することもあれば、項目によって想定する友人をかえて回答することもあると推測され、得られた結果が反映する友人関係が調査対象者によって大きく異なっていた可能性が考えられる。そこで、友人関係と孤独感の関連を明らかにするためには、1人の友人に特定して検討し直す必要があると考えられる。また、高木(2003)の研究では、孤独感尺度として、改訂UCLA孤独感尺度(工藤・西川, 1983)が用いられていたが、この尺度は、孤独感を一次的に捉えて作成されたものである。それに対して、孤独感を、「孤立化の方へと追いやる孤独感(共感性)」と「個性を持つ存在としての自覚を促す孤独感(個別性)」という2側面から捉えている孤独感尺度として、落合(1983)の類型別孤独感尺度(Loneliness Scale by Ochiai ; LSO)がある(榎本・清水, 1992)。落合(1983)は前者に対応する下位尺度を「LSO-U」、後者に対応する下位尺度を「LSO-E」と名付けている。友人関係と孤独感との関連について検討するにあたり、孤独感の各側面によって関連の様相が異なる可能性が考えられる。したがって、関連の様相をより詳細に検討するためには、孤独感尺度として、落合(1983)の類型別孤独感尺度を用いることが適当であると考えられる。

以上より、本研究では、まず、丹野(2008)の友人関係機能尺度の項目を用いて、大学生の「最も親しい同性友人」の1人との友人関係機能の構造を再検討することを第1の目的とする。友人関係機能尺度は、丹野(2008)の研究において各下位尺度の1次元性と信頼性の確認が行われているが、下位尺度間に強い相関がみられていることから、それらが統合した形で抽出されると考えられる。次に、「最も親しい同性友人」の1人との友人関係機能の下位尺度と孤独感の2側面との間にどのような関連があるのかについての検討を行うことを第2の目的とする。孤独感の各側面によって友人関係機能の下位尺度との関連の様相が異なる可能性が考えられる。

さらに、丹野(2008)は、友人関係の満足度(以下、関係満足度)についても取り上げており、友人関係機能成分の中には、関係満足度を媒介せずに直接的に内的適応を促進する機能を果たすものと、関係満足度を媒介して内的適応を促進するものがあることを明らかにしている。そこで、本研究においても、関係満足度を取り上げ、その個人にとっての「最も親しい同性友人」の1人との友

人関係機能と孤独感の関連の検討を行うこととする。

## 方法

**調査対象者** 大学生 282 名を調査対象者とした。全調査対象者のうち、回答に不備のあったものを除き、270 名 (男性 132 名, 女性 138 名) を有効回答者とした。有効回答者の平均年齢は 20.7 歳 ( $SD = 1.04$ ) であった。

**調査時期** 2009 年 11 月に実施した。

**手続き** 個別, 集団による無記名自記式質問紙調査を実施した。

**質問紙構成** ①フェイス項目; 対象者の性別, 年齢。②友人の想定; 対象者の「最も親しい同性友人」の 1 人を想定させた。③関係満足度; 想定された友人との関係に対する満足度について, 「1 非常に不満である」, 「2 不満である」, 「3 どちらかといえば不満である」, 「4 どちらともいえない」, 「5 どちらかといえば満足である」, 「6 満足である」, 「7 非常に満足である」の 7 件法で回答を求めた。④友人関係機能尺度 (丹野, 2008); 想定された友人との関係について, 「1 あてはまらない」, 「2 あまりあてはまらない」, 「3 どちらともいえない」, 「4 ややあてはまる」, 「5 あてはまる」の 5 件法で全 45 項目への回答を求めた。⑤類型別孤独感尺度 (落合, 1983); この尺度は, LSO-U と LSO-E の 2 因子 16 項目から構成される。LSO-U は, 得点が高いほど, 人間同士は理解・共感できると感じていることを示す。また, LSO-E は, 得点が高いほど, 個性性に気付いていることを示す。全 16 項目について, 「1 いいえ」, 「2 どちらかというといいえ」, 「3 どちらともいえない」, 「4 どちらかというとはい」, 「5 はい」の 5 件法で回答を求めた。

## 結果

### 友人関係機能尺度の構造

**先行研究における各友人関係機能成分の信頼性と成分間相関** 友人関係機能尺度について, 丹野 (2008) の研究で抽出された成分ごとに, Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果, 「安心・気楽さ」が  $\alpha = .88$ , 「娯楽性」が  $\alpha = .74$ , 「関係継続展望」が  $\alpha = .89$ , 「情緒的結びつき」が  $\alpha = .83$ , 「相談・自己開示」が  $\alpha = .79$ , 「支援性」が  $\alpha = .85$ , 「肯定・受容」が  $\alpha = .58$ , 「学習・自己向上」が  $\alpha = .86$ , 「人生の重要な意味」が  $\alpha = .87$  であった。また, 成分ごとの回答得点の平均値を用いて, 各成分間の相関係数を算出した。その結果, 各成分間には, .51-.78 という強い正の相関がみられた (Table 1)。

Table 1  
友人関係機能成分間の相関係数  
友人関係機能成分

	安心・気楽	娯楽性	関係継続	情緒的	相談・開示	支援性	肯定・受容	学習	人生
安心・気楽	—	.77	.78	.67	.69	.69	.58	.56	.55
娯楽性		—	.73	.68	.64	.66	.53	.66	.65
関係継続			—	.78	.74	.75	.59	.67	.75
情緒的				—	.74	.69	.61	.66	.74
相談・開示					—	.74	.56	.67	.65
支援性						—	.58	.74	.69
肯定・受容							—	.52	.51
学習								—	.76
人生									—

Table 2  
友人関係機能尺度の因子分析結果(主因子法, promax回転)

因子名 ( $\alpha$ 係数)	項目内容	F1	F2	F3	F4	F5	F6
気楽さ・楽しさ ( $\alpha = .92$ )	(安) Aさんとは、気楽につきあえる	.83	-.23	.13	.03	.08	-.07
	(娛) Aさんと一緒にいると、楽しい	.81	.11	-.12	-.03	.02	.03
	(安) Aさんとの関係は、とても心地よい	.81	-.05	.23	-.01	.01	-.10
	(安) Aさんとは、自然と一緒にいられる	.76	-.15	-.05	.13	-.02	.13
	(娛) Aさんと話す、とても愉快的気分になることが多い	.69	.26	.08	.07	-.30	.06
	(安) Aさんとの関係は、とても安心する	.61	-.07	.20	-.02	.12	-.05
	(関) Aさんとは、年をとっても友人でいたい	.55	.05	-.06	-.01	.13	.27
	(安) Aさんと一緒にいると、なんとなく楽だ	.54	-.03	-.18	.13	.10	.21
	(娛) Aさんと一緒にいると、退屈しない	.50	.28	-.11	.03	-.03	-.04
自己向上 ( $\alpha = .89$ )	(学) Aさんとの関係で、新しい考えに気がつくことがある	-.07	.89	-.08	.03	-.02	-.04
	(学) Aさんから、学ぶことが多い	.03	.72	-.08	.02	.22	-.12
	(学) Aさんから、影響を受けることが多い	-.01	.57	.18	.11	.04	-.07
	(学) Aさんとの関係で、「新しい自分」に気づくことがある	-.07	.56	.18	.27	-.20	.01
	(人) Aさんと過ごした時間は、今後の人生でも重要な意味をもつと思う	.01	.49	.14	-.08	.13	.27
(学) Aさんとの関係は、自分自身の成長にとって重要であると思う	.00	.49	.09	-.05	.26	.17	
特別性 ( $\alpha = .82$ )	(情) Aさんが近くにいないときも、どこかでお互いのことを気にかけている	-.10	-.15	.92	.05	-.10	.13
	(娛) Aさんと遊ぶのは、他の友人と遊ぶのとは異なる楽しさがある	.23	.15	.64	-.18	-.18	.08
	(人) Aさんのおかげで、自分の人生は有意義なものになっていると思う	.05	.25	.56	-.09	.10	.03
	(人) Aさんとの関係がなければ、今の自分はいないと思う	-.05	.23	.43	-.05	.07	.22
支持・受容 ( $\alpha = .87$ )	(情) Aさんとは、つらいときに励ましあう仲であらう	-.03	.04	-.06	.72	-.03	.20
	(肯) Aさんは、自分の良い部分を認めてくれる	.15	.11	-.01	.64	-.10	-.00
	(肯) Aさんは、自分を好意的に評価してくれる	.23	-.01	.01	.51	.19	-.12
	(肯) Aさんは、自分の存在を受け入れてくれる	.17	.18	-.02	.50	.07	-.03
	(相) Aさんとは、愚痴(ぐち)をいいあえる	.19	.02	-.29	.49	-.11	.36
	(相) Aさんは、自分に悩みをうちあけてくれる	-.11	-.15	.21	.42	.21	.23
被援助性 ( $\alpha = .82$ )	(肯) Aさんは、自分を大切にしてくれていると思う	.06	.02	.37	.41	.16	-.05
	(支) Aさんはいざというとき、力になってくれる	.10	.04	-.06	-.09	.78	.01
	(相) Aさんは、よい相談相手である	-.08	.00	-.06	.13	.70	.16
	(支) Aさんは、頼れる存在である	.18	.03	-.22	-.06	.60	.03
情緒的繋がり ( $\alpha = .90$ )	(支) Aさんは、ふだんから私を助けてくれる	-.13	.09	.29	.23	.45	-.20
	(情) Aさんとは、絆(きずな)のようなものを感じる	-.04	-.00	.37	.08	-.02	.61
	(関) Aさんは、生涯の友となると思う	.23	-.08	.11	-.04	.22	.56
	(情) Aさんは、いわゆる「心の友」である	.11	-.03	.30	.12	-.06	.55
除外項目	(関) Aさんとは、長いつきあいになると思う	.22	-.02	.30	-.02	.06	.41
	(娛) Aさんは、趣味や娯楽の仲間である						
	(関) Aさんとの関係は、何があっても切れないと思う						
	(関) Aさんとは、一緒に人生を楽しんでいけると思う						
	(情) Aさんがつらいと、自分もつらく感じる						
	(相) Aさんには、なんでも話せる						
	(相) Aさんとは、他の人にはできないような真剣な話をすることもできる						
	(支) Aさんとは、本当に困ったときに助け合おうと思う						
	(支) Aさんがいると、とても助かる						
	(肯) Aさんは、私に居場所を作ってくれる						
(人) Aさんと出会ったことで、自分の人生は変わったと思う							
(人) Aさんは、自分の人生を語る上で欠かせない存在である							

注) 括弧内は丹野(2008)の下位尺度名: 安=安心さ・気楽さ, 娛=娯楽性, 関=関係継続展望, 情=情緒的結びつき, 相=相談・自己開示, 支=支援性, 肯=肯定・受容, 学=学習・自己向上, 人=人生の重要な意味

**友人関係機能尺度の因子分析による構造の再検討** 友人関係機能尺度(丹野, 2008)の全45項目に関して、因子分析(主因子法, promax 回転)を行った。因子負荷量|.40|以上かつ共通性|.20|以上という基準を設けた結果、11項目を除外し、6因子34項目を採用した(Table 2)。第1因子は、その友人との関係の気楽さや楽しさを反映しているため、「気楽さ・楽しさ」因子と命名した。第2因子は、その友人との関係から影響を受け、自己向上できることを示しているため、「自己向上」因子と命名した。第3因子は、その友人との関係が他の友人との関係と差異化できる、特別なものであることを示しているため、「特別性」因子と命名した。第4因子は、相互的に支持し合い、受容し

合う関係を反映しているため、「支持・受容」因子と命名した。第5因子は、友人によって一方的に支援・援助されていることを示しているため、「被援助性」因子と命名した。第6因子は、その友人との情緒的な繋がりがあがるがゆえに、将来的にも長く付き合う展望を持てることを示していると考えられるため、「情緒的繋がり」因子と命名した。各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数は、「気楽さ・楽しさ」が  $\alpha=.92$ 、「自己向上」が  $\alpha=.89$ 、「特別性」が  $\alpha=.82$ 、「支持・受容」が  $\alpha=.87$ 、「被援助性」が  $\alpha=.82$ 、「情緒的繋がり」が  $\alpha=.90$  であった。

### 孤独感尺度の構造

類型別孤独感尺度 (落合, 1983) の各項目の得点は、LSO-U では、人間同士は理解・共感できると感じているほど高得点になるように、LSO-E では、個別性に気付いているほど高得点になるように採点した。すなわち、項目 1, 7, 10, 12, 14 は逆転項目であるため、「はい」を 1, 「いいえ」を 5 として採点した。類型別孤独感尺度の全 16 項目に関して、因子分析 (主因子法, promax 回転) を行った。因子負荷量|.40以上かつ共通性|.20|という基準を設けた結果、落合 (1983) の研究で LSO-E に含まれていた 2 項目を除外し、残りの 5 項目を LSO-E 尺度項目として採用した (Table 3)。Cronbach の  $\alpha$  係数は、LSO-U が  $\alpha=.88$ 、LSO-E が  $\alpha=.76$  であった。

### 友人関係機能と関係満足度、孤独感との関連

友人関係機能の 6 因子が孤独感の 2 因子に直接影響を及ぼす場合と、友人関係機能の 6 因子が関係満足度を媒介して孤独感の 2 因子に間接的に影響を及ぼす場合とを仮定したモデルを作成し、男女別にパス解析を行った。男女それぞれ、ワールド検定によって有意な影響がみられなかったパスを削除しながら同様の分析を繰り返した。男性において 5%水準で有意であったパスと標準化推定値と誤差変数を Figure 1 に示した。適合度指標は、GFI=.984, AGFI=.918, RMSEA=.067 であり、モデルがデータに適合していることが示された。男性の場合、「関係満足度」に対して、「気楽さ・楽しさ」と「情緒的繋がり」が有意な正のパスを示し、「特別性」が有意な負のパスを示しており、 $R^2=.44$  であった。ただし、負のパスの係数は-.17と低かった。孤独感尺度との関連については、LSO-U

Table 3  
孤独感尺度の因子分析結果 (主因子法, promax 回転)

項目内容		F1	F2	
LSO-U ( $\alpha=.88$ )	6 私の考えや感じを何人かの人はわかってくれると思う。	.88	.20	
	2 人間は、他人の喜びや悩みと一緒に味わうことができると思う。	.77	.13	
	10 私の生き方を誰もわかってくれはしないと思う。	.74	-.06	
	7 私の考えや感じを誰もわかってくれないと思う。	.73	.03	
	4 私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている。	.72	.10	
	14 誰も私をわかってくれないと、私は感じている。	.70	-.13	
	3 私のことをまわりの人は理解してくれていると、私は感じている。	.59	.04	
	15 人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う。	.55	.07	
	1 私のことに親身になってくれる人はいないと思う。	.54	-.06	
	LSO-E ( $\alpha=.76$ )	16 どんなに親しい人も、結局、自分とは別個の人間であると思う。	.26	.73
		5 結局、自分はひとりでしかないと思う。	-.21	.66
		9 人間は、本来、ひとりぼっちなのだと思う。	-.19	.63
		11 結局、人間は、ひとりで生きるように運命づけられていると思う。	-.33	.54
		8 自分問題は、最後は、自分で解決しなくてはならないのだと思う。	.26	.45
	除外項目	12 私とまったく同じ考えや感じを持っている人が、必ずどこかにいると思う。		
13 私の人生と同じ人生は、過去にも未来にもないと思う。				
因子間相関		-	-.50	

に対して、「支持・受容」と「情緒的繋がり」が有意な正のパスを示し、 $R^2=.20$ であった。LSO-E に対しては有意なパスはみられなかった。また、女性において5%水準で有意であったパスと標準化推定値と誤差変数を Figure 2 に示した。適合度指標は、GFI=.996, AGFI=.979, RMSEA=.000 であり、モデルがデータに適合していることが示された。女性は「関係満足度」に対して、「気楽さ・楽しさ」と「情緒的繋がり」が有意な正のパスを示し、 $R^2=.36$ であった。孤独感尺度との関連については、LSO-U に対して、「気楽さ・楽しさ」が有意な正のパスを示し、 $R^2=.13$ であった。LSO-E に対しては有意なパスはみられなかった。なお、男女ともに「関係満足度」から LSO-U と LSO-E に対する有意なパスはみられなかった。

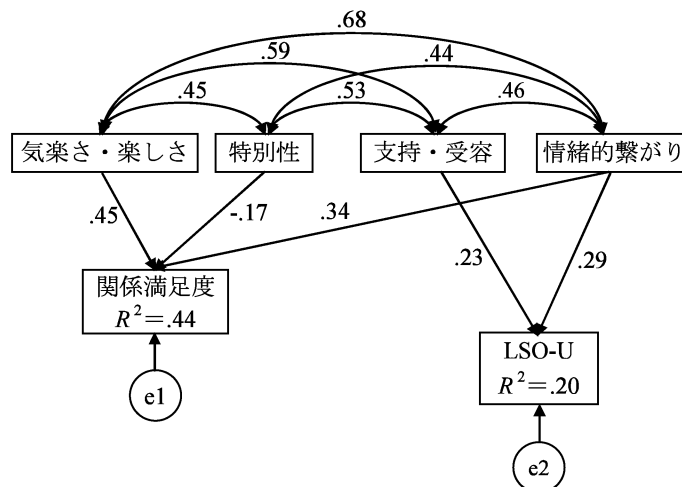


Figure 1 友人関係機能因子が関係満足度と孤独感に及ぼす影響 (男性)  
注) いずれのパスも  $p < .05$

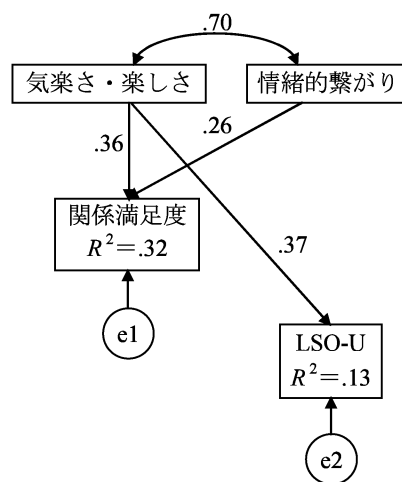


Figure 2 友人関係機能因子が関係満足度と孤独感に及ぼす影響 (女性)  
注) いずれのパスも  $p < .05$

## 考察

本研究では、丹野 (2008) の友人関係機能尺度の項目を用いて、大学生における「最も親しい同性友人」の 1 人との友人関係機能の構造を再検討することを第 1 の目的とした。また、「最も親しい同性友人」の 1 人との友人関係機能の下位尺度と孤独感との関連を検討することを第 2 の目的とした。

### 友人関係機能の構造の検討

友人関係機能尺度 (丹野, 2008) を因子分析した結果、「気楽さ・楽しさ」、「自己向上」、「特別性」、「支持・受容」、「被援助性」、「情緒的繋がり」の 6 因子が見出された。このうち、「気楽さ・楽しさ」因子には丹野 (2008) における「安心さ・気楽さ」成分と「娯楽性」成分の項目が多く含まれていたが、この 2 成分間には  $r=.77$  という強い相関がみられていたため、1 つの因子に統合されたと考えられる。また、「情緒的繋がり」因子についても、丹野 (2008) における「情緒的結びつき」成分と「関係継続展望」成分の項目が 2 項目ずつ含まれていたが、この 2 成分間には  $r=.78$  という強い相関がみられていた。このように、丹野 (2008) における 9 成分間には、本研究においても強い相関がみられたものがあり、それらが統合した形で抽出されたと考えられる。また、本研究で新しく見出された 6 因子は、各  $\alpha$  係数の最低値、最高値、平均値のいずれも、丹野 (2008) の 9 成分のそれらよりも高くなっており、全体的に信頼性がより高いものになったと考えられる。

### 友人関係機能と関係満足度、孤独感との関連

友人関係機能と関係満足度との関連を検討した結果、男子大学生・女子大学生ともに、最も親しい同性友人の 1 人との関係において、「気楽さ・楽しさ」や「情緒的繋がり」が関係満足度を促進していた。すなわち、最も親しい同性友人の 1 人と「気楽で楽しく、情緒的に繋がりを感じる関係」にある場合に、その友人との関係に満足しているといえる。しかし、男子大学生においては、近くにいないときもその友人のことを気にかけるなどといった、関係の「特別性」が関係満足度を低下させる傾向もみられた。このことは、その友人が近くにいないときに相手のことを気かけ過ぎて不安や心配な気持ちになったり、その友人との関係に他の友人とは異なる楽しさがあるという思いが強過ぎると、その友人 1 人との関係への期待が高まったりし、かえって友人関係への満足度が低く評定される可能性があるからではないかと推察される。ただし、パスの係数の値からその影響力は低いものと考えられる。

次に、友人関係機能と孤独感 (LSO-U, LSO-E) との関連を検討した結果、男子大学生における最も親しい同性友人の 1 人との関係では、「支持・受容」と「情緒的繋がり」が関係満足度を媒介せず直接的に LSO-U 得点を高めていた。すなわち、最も親しい同性友人の 1 人と「受容的で、情緒的につながっている関係」を築いている場合、人間同士は共感し合えると感じていると考えられる。一方、女子大学生は、最も親しい同性友人の 1 人との関係で「気楽さ・楽しさ」を得ている場合に、関係満足度を媒介せず直接的に LSO-U 得点を高めていた。このことから、女子大学生は、最も親しい同性友人の 1 人と「気楽で楽しい関係」を築いている場合には、楽しい気持ちを相手と共有することができ、人間同士は理解し合えると感じられていると考えられる。

一方、本研究では、LSO-E に対して、有意に影響を及ぼす友人関係機能因子はなかった。このこ

とから、自己の個別性への自覚を持つかどうかは、最も親しい同性友人の1人との関係にはあまり影響されず、その他の要因が関係していると推察される。

また、丹野 (2008) の研究では、友人関係機能成分の中には関係満足度を媒介して間接的に内的適応を促進するものがあったが、本研究では、友人関係機能因子のいずれも関係満足度を媒介することなく直接的に孤独感に影響を与えていた。この結果から、最も親しい同性友人の1人との関係に満足している場合でも、孤独感を低減させることができないこともあれば、たとえその関係に十分に満足していない場合でも、ある特定の関係が築けていれば孤独感を低減させることもあり、関係に満足することとそれが個人の適応へとつながることは、別の問題として捉えていく必要があると考えられる。

### 本研究の成果と課題

本研究の結果から、大学生においては、最も親しい同性友人の1人との関係が、「孤立化の方へと追いやる孤独感 (共感性)」の低減、すなわち、人間同士の共感可能性への自覚に重要となることが示唆された。そして、そのような自覚を持つためには、ただ親しい同性友人がいるということだけでなく、その友人とある特定の関係を築けているかどうかの問題となることが明らかとなった。また、吉山 (1992) の研究では、「人間同士は理解・共感し合える」と感じている者ほど、青年期の発達課題の1つである独立意識が高い傾向にあることが明らかにされている。この結果と、本研究の結果とを合わせると、共感可能性への自覚を促すとされる、最も親しい同性友人の1人との関係は、青年期の発達課題を達成していく上でも重要な役割を果たしている可能性が考えられる。ただし、本研究の結果では、これらの関連を直接検討していないため、今後は、青年期の発達課題と友人関係の様相との関連に焦点を当て、さらに詳しく検討していく必要がある。

また、本研究では、内的適応の指標として孤独感しか取り扱わなかった。しかし、大学生がより適応的な生活を送ってけるように機能する友人関係の様相についてさらに明らかにしていくためには、その他の適応指標についても取り上げて検討する必要があると思われる。

### 引用文献

- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- 藤井恭子 (2001). 大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要, **6**, 69-78.
- 工藤 力・西川正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) 実験社会心理学研究, **22**, 99-108.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 落合良行 (1983). 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, **31**, 332-336.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 高木麻未 (2003). 大学生における同性友人とのつきあい方と孤独感の関連 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, **58**, 161-172.



- 丹野宏昭 (2008). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, **20**, 55-69.
- 丹野宏昭・松井 豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, **32**, 21-30.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8(2)**, 67-75.
- 吉山尚裕 (1992). 青年期の孤独感—孤独感と社会的傾性— 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, **30**, 69-79.